

招待席

## 太宰 治

だざい おさむ 小説家 1909.6.19 - 1948.6.13 青森県北津軽郡に生まれる。昭和二十三年(1948)六月十三日東京都下玉川上水に入水、十九日に発見された。掲載作は自殺直前の「世界」五月号に初出、六月十九日桜桃忌の称もこれに因む。

## 桜桃

われ、山にむかひて、目を挙ぐ。

詩篇、第二百二十一。

子供より親が大事と、思ひたい。子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考へてみても、何、子供よりも、その親のはうが弱いのだ。少くとも、私の家庭に於いては、さうである。まさか、自分が老人になってから、子供に助けられ、世話にならうなどといふ図々(づうづう)しい虫のよい下心は、まったく持ち合せてゐないけれども、この親は、その家庭に於いて、常に子供たちのご機嫌ばかり伺(うかが)つてゐる。子供、といつても、私のところの子供たちは、皆まだひどく幼い。長女は七歳、長男は四歳、次女は一歳である。それでも、既にそれぞれ、両親を圧倒し掛けてゐる。父と母は、さながら子供たちの下男下女の趣きを呈してゐるのである。

夏、家族全部三畳間に集り、大にぎやか、大混雑の夕食をしたため、父はタオルでやたらに顔の汗を拭き、

「めし食つて大汗かくもげびた事、と柳多留(やなぎだる)にあつたけれども、どうも、こんなに子供たちがうるさくては、いかにお上品なお父さんと雖(いへど)も、汗が流れる。」

と、ひとりぶつぶつ不平を言ひ出す。

母は、一歳の次女におつぱいを含ませながら、さうして、お父さんと長女と長男のお給仕をするやら、子供たちの、こぼしたものを拭くやら、拾ふやら、

鼻をかんでやるやら、八面六臂(はちめんろくび)のすさまじい働きをして、  
「お父さんは、お鼻に一ばん汗をおかきになるやうね。いつも、せはしくお鼻を拭いていらつしやる。」

父は苦笑して、

「それぢや、お前はどこだ。内股かね？」

「お上品なお父さんですこと。」

「いや、何もお前、医学的な話ぢやないか。上品も下品も無い。」

「私はね、」

と母は少しまじめな顔になり、

「この、お乳とお乳のあひだに、……涙の谷、……」

涙の谷。

父は黙して、食事をつづけた。

私は家庭に在つては、いつも冗談を言つてゐる。それこそ「心に悩みわづらふ」事の多いゆゑに、「おもてには快樂(けらく)をよそはざるを得ない、とでも言はうか。いや、家庭に在る時ばかりでなく、私は人に接する時でも、心がどんなにつらくても、からだがどんなに苦しくても、ほとんど必死で、楽しい雰囲気(ふんゐき)を創(つく)る事に努力する。さうして、客とわかれた後、私は疲労によるめき、お金の事、道德の事、自殺の事を考へる。いや、それは人に接する場合だけではない。小説を書く時も、それと同じである。私は、悲しい時に、かへつて軽い楽しい物語りの創造に努力する。自分では、もつとも、おいしい奉仕のつもりであるのだが、人はそれに気づかず、太宰といふ作家も、このごろは軽薄である、面白さだけで読者を釣る、すこぶる安易、と私をさげすむ。

人間が、人間に奉仕するといふのは、悪い事であらうか。もつたいぶつて、なかなか笑はぬといふのは、善い事であらうか。

つまり、私は糞真面目で興覚めな、気まづい事(5字に、傍点)堪(た)へ切れないのだ。私は、私の家庭に於いても、絶えず冗談を言ひ、薄氷を踏む思ひで冗談を言ひ、一部の読者、批評家の想像を裏切り、私の部屋の畳は新しく、机上は整頓せられ、夫婦はいたはり、尊敬し合ひ、夫は妻を打つた事など無いのは勿論、出て行け、出て行きます、などの乱暴な口争ひした事さへ一度も無かつたし、父も母に負けずに子供を可愛がり、子供たちも父母に陽気によくなつく。

しかし、それは外見、母が胸をあけると、涙の谷、父の寝汗も、いよいよひどく、夫婦は互ひに相手の苦痛を知つてゐるのだが、それに、さはらないやうに努めて、父が冗談を言へば、母も笑ふ。

しかし、その時、涙の谷、と母に言はれて父は黙し、何か冗談を言つて切りかへさうと思つても、とつさにうまい言葉が浮ばず、黙しつづけると、いよいよ気まづさが積り、さすがの「通人」の父も、たうとう、まじめな顔になつてしまつて、

「誰か、ひとを雇ひなさい。どうしたつて、さうしなければ、いけない。」

と、母の機嫌を損じないやうに、おつかなびつくり、ひとりごとのやうにして呟(つぶや)く。

子供が三人。父は家事には全然、無能である。蒲団さへ自分で上げない。さうして、ただもう馬鹿げた冗談ばかり言つてゐる。配給だの、登録だの、そんな事は何も知らない。全然、宿屋住ひでもしてゐるやうな形。来客。饗応。仕事部屋にお弁当を持つて、出かけて、それつきり一週間も御帰宅にならない事もある。仕事、仕事、といつも騒いでゐるけれども、一日に二、三枚くらゐしかお出来にならないやうである。あとは、酒。飲みすぎると、げつそり痩せてしまつて寝込む。そのうへ、あちこちに若い女の友達などもある様子だ。

子供、……七歳の長女も、ことしの春に生れた次女も、少し風邪(かぜ)をひき易いけれども、まづまあ人並。しかし、四歳の長男は、痩せこけてゐて、まだ立てない。言葉は、アアとかダアとか言ふきりで一語も話せず、また人の言葉を聞きわかる事も出来ない。這つて歩いてゐて、ウンコもオシッコも教へない。それでゐて、ごはんは実にたくさん食べる。けれども、いつも痩せて小さく、髪の毛も薄く、少しも成長しない。

父も母も、この長男に就いて、深く話合ふことを避ける。白痴、唾(おし)、……それを一言でも口に出して言つて、二人で肯定し合ふのは、あまりに悲惨だからである。母は時々、この子を固く抱きしめる。父はしばしば発作的に、この子を抱いて川に飛び込み死んでしまひたく思ふ。

「唾の次男を斬殺す。×日正午すぎ×区×町×番地×商、何某(五三)さんは自宅六畳間で次男何某(一八)君の頭を薪割で一撃して殺害、自分はハサミで喉(のど)を突いたが死に切れず附近の医者に収容したが危篤、同家では最近二女某(二二)さんに養子を迎へたが、次男が唾の上に少し頭が悪いので娘可愛さから思ひ余つたもの。」

こんな新聞の記事もまた、私にヤケ酒を飲ませるのである。

ああ、ただ単に、発育がおくれてゐるといふだけの事であつてくれたら！この長男が、いまに急に成長し、父母の心配を憤(いきどほ)り嘲笑(てうせう)するやうになつてくれたら！夫婦は親戚にも友人にも誰にも告げず、ひそかに心でそれを念じながら、表面は何も気にしてゐないみたいに、長男をからかつて笑つてゐる。

母も精一ぱいの努力で生きてゐるのだらうが、父もまた、一生懸命であつた。

もともと、あまりたくさん書ける小説家では無いのである。極端な小心者なのである。それが公衆の面前に引き出され、へどもどしながら書いてゐるのである。書くのがつらくて、ヤケ酒に救ひを求め。ヤケ酒といふのは、自分の思つてゐることを主張できない、もどつかしさ、いまいまして飲む酒の事である。いつでも、自分の思つてゐることをハツキリ主張できるひとは、ヤケ酒なんか飲まない。(女に酒飲みの少いのは、この理由からである。)

私は議論をして、勝つたためしが無い。必ず負けるのである。相手の確信の強さ、自己肯定のすさまじさに圧倒せられるのである。さうして私は沈黙する。しかし、だんだん考へてみると、相手の身勝手に気がつき、ただこつちばかりが悪いのではないのが確信せられて来るのだが、いちど言ひ負けたくせに、またしつこく戦闘開始するのも陰惨だし、それに私には言ひ争ひは殴り合ひと同じくらゐにいつまでも不快な憎しみとして残るので、怒りにふるへながらも笑ひ、沈黙し、それから、いろいろさまざま考へ、ついヤケ酒といふ事になるのである。

はつきり言はう。くどくどと、あちこち持つてまはつた書き方をしたが、実はこの小説、夫婦喧嘩の小説なのである。

「涙の谷。」

それが導火線であつた。この夫婦は既に述べたとほり、手荒なことは勿論、口汚く罵(ののし)り合つた事さへない顔(すこぶ)るおとなしい一組ではあるが、しかし、それだけまた一触即発の危険にをのいてゐるところもあつた。両方が無言で、相手の悪さの証拠固めをしてゐるやうな危険、一枚の札(ふだ)をちらと見ては伏せ、また一枚ちらと見ては伏せ、いつか、出し抜けに、さあ出来ましたと札をそろへて眼前にひろげられるやうな危険、それが夫婦を互ひに遠慮深くさせてゐたと言つて言へないところが無いでも無かつた。妻のはうはとにかく、夫のはうは、たたけばたたくほど、いくらでもホコリの出さうな男なのである。

「涙の谷。」

さう言はれて、夫は、ひがんだ。しかし、言ひ争ひは好まない。沈黙した。お前はおれに、いくぶんあてつける気持で、さう言つたのだらうが、しかし泣いてゐるのはお前だけでない。おれだつて、お前に負けず、子供の事は考へてゐる。自分の家庭は大事だと思つてゐる。子供が夜中に、へんな咳(せき)一つしても、きつと眼がさめて、たまらない気持になる。もう少し、ましな家に引越して、お前や子供たちをよるこばせてあげたくてならぬが、しかし、おれには、どうしてもそこまで手が廻らないのだ。これでもう精一ぱいなのだ。おれだつて、兇暴な魔物ではない。妻子を見殺しにして平然、といふやうな「度胸」を持つてはゐないのだ。配給や登録の事だつて、知らないのではない、知るひ

ま(2字に、傍点)が無いのだ。……父は、さう心の中で呟き、しかし、それを言ひ出す自信も無く、また、言ひ出して母から何か切りかへされたら、ぐうの音(ね)も出ないやうな気もして、

「誰か、ひとを雇ひなさい。」

と、ひとりごとみたいに、わづかに主張してみた次第なのだ。

母も、いつたい、無口なほうである。しかし、言ふことに、いつも、つめたい自信を持つてゐた。(この母に限らず、どこの女も、たいていそんなものであるが。)

「でも、なかなか、来てくれるひとありませんから。」

「捜(さが)せば、きっと見つかりますよ。来てくれるひとが無いんぢや無い、ゐてくれるひとが無いんぢやないかな？」

「私が、ひとを使ふのが下手だとおつしやるのですか？」

「そんな、……」

父はまた黙した。じつは、さう思つてゐたのだ。しかし、黙した。

ああ、誰かひとり、雇つてくれたらいい。母が末の子を背負つて、用足しに外に出かけると、父はあとの二人の子の世話を見なければならぬ。さうして、来客が毎日、きまつて十人くらゐづつある。

「仕事部屋のはうへ、出かけたらいんど。」

「これからですか？」

「さう。どうしても、今夜のうちに書上げなければならない仕事があるんだ。」

それは嘘でなかつた。しかし、家の中の憂鬱(いううつ)から、のがれたい気もあつたのである。

「今夜は、私、妹のところへ行つて来たいと思つてゐるのですけど。」

それも、私は知つてゐた。妹は重態なのだ。しかし、女房が見舞ひに行けば、私は子供のお守りをしてゐなければならぬ。

「だから、ひとを雇つて、……」

言ひかけて、私は、よした。女房の身内のひとの事に少しでも、ふれると、ひどく二人の気持がややこしくなる。

生きるといふ事は、たいへんな事だ。あちこちから鎖がからまつてゐて、少しでも動くと、血が噴(ふ)き出す。

私は黙つて立つて、六畳間の机の引出しから稿料のはひつてゐる封筒を取り出し、袂(たもと)につつ込んで、それから原稿用紙と辞典を黒い風呂敷に包み、物体でないみたいに、ふはりと外に出る。

もう、仕事どころではない。自殺の事ばかり考へてゐる。さうして、酒を飲む場所へまつすぐに行く。

「いらつしやい。」

「飲まう。けふはまた、ばかに綺麗な縞(しま)を、……」

「わるくないでせう？ あなたの好(す)く縞だと思つてゐたの。」

「けふは、夫婦喧嘩でね。陰(いん)にこもつてやりきれねえんだ。飲まう。今夜は泊るぜ。だんぜん泊る。」

子供より親が大事、と思ひたい。子供よりも、その親のほうが弱いのだ。

桜桃が出た。

私の家では、子供たちに、ぜいたくなものを食べさせない。子供たちは、桜桃など、見た事も無いかも知れない。食べさせたら、よろこぶだらう。父が持つて帰つたら、よろこぶだらう。蔓(つる)を糸でつないで、首にかけると、桜桃は、珊瑚(さんご)の首飾のやうに見えるだらう。

しかし、父は、大皿に盛られた桜桃を、極めてまづさうに食べては種を吐き、食べては種を吐き、食べては種を吐き、さうして、心の中で虚勢みたいに咳(つぶや)く言葉は、子供よりも親が大事。

(昭和二十三年五月)